

本科 0 期 2 月度

解答

Z会東大進学教室

東大国語



【問題】（演習）

出典：『玉壺清話』／ 東京大学 10年

書き下し文

一巨商姓段なる者、一鸚鵡の甚だ慧なるを蓄ふ。能く李白の宮詞を誦し、客至る毎に則ち茶を呼び、客人の安否寒暄を問ふ。主人之を惜み、意を籠參に加ふ。一旦段生事を以て獄に繫がる。半年にして方めて釀されて家に到り、籠に就きて与に語りて曰く、「鸚哥、我獄中より半年出づる能はず、日夕惟只汝を憶ふのみ。家人餃飲、時を失する無しや否や」と。鸚哥語りて曰く、「汝禁に在ること數月にして堪へざるは、鸚哥の籠閉せられて歲久しきに異ならず」と。其の商大いに感泣し、乃ち特に車馬を具へ、携して秦隴に至り、籠を掲げて泣きて放つ。其の鸚哥羽を整へ徘徊し、去るに忍びざるに似たり。後に聞くならく官道の隣樹の末に止巣し、凡そ吳商の車を驅りて秦に入る者あれば、巣外に鳴きて曰く、「客還我が段二郎の安否を見るや。若し見ゆる時あれば、我が為に鸚哥甚だ二郎を憶ふと道へ」と。

現代語訳

ある大商人で姓が段という者〔=段という一族の者〕は、一羽の鸚鵡でとても賢い鸚鵡を飼っていた。李白の宮怨の詩を詠誦することができ、客が訪れるたびに（家人に知らせて）茶を（淹れて出すよう）呼びかけ、客の日常の様子や気候の寒暖を訊ねた。飼い主（である段氏）はこれを愛惜し、配慮を（鸚鵡の）鳥籠や餌に与えた〔=鳥籠の造作や餌の質に気を遣った〕。ある日段氏はある事によつて牢獄に囚われた。半年経つてやつと釈放されて（自分の）家に戻り、鳥籠（の処）に行き（鸚鵡に）向かって語つて言うには、「鸚鵡よ、私は獄中から半年も出ることができず、朝も晩もただお前（のこと）を思うばかりであった。家の者の（お前への）餌やりや水やりは、（適切な）時刻を逃すことがなかつたかどうか」〔=餌や水を貰い損なうことはなかつたか〕と。鸚鵡が（段氏に）語つて言う

には、「あなたが監獄にいること数ヶ月で（嘆きに）堪えられないのは、（私）鸚鵡が鳥籠に閉じ込められて何年もの長き（にわたっているの）と異なりません」と。かの商人「＝段氏」は（それを聞いて）たいそう感じ入つて落涙し、特別に馬と車を用意し、（鸚鵡の入った鳥籠を）携えて秦隣に到ると、鳥籠を掲げて泣きながら（鸚鵡を）放つた。（鳥籠から解放された）かの鸚鵡は羽繕いをして（そのあたりを）飛びまわり、（そこから）去ることができないように見えた。後に聞くところによると、役所に向かう道の丘上の樹の梢に巣をかけ、誰であろうが（段氏の住んでいた）呉の国の商人で車を驅つて秦に入る者があると、巣の外に（出て）鳴いて言つたという、「旅の方よ、（あなたの）故郷（の呉）で私の（飼い主であった）段二郎の安否をご存じありませんか。もし（彼と）会うことがあったら、私のために伝えてください、（あなたの飼っていた）鸚鵡はよく二郎（のこと）を憶えている〔＝あなたのことを決して忘れない〕」と。

○訳注＝本文末尾近くの「還」は副詞「また」として訓読してあるが、この場合副詞の形での適切な訳語がない。「還」は「行き先から経て巡つて出発点に戻る」を意味する字であり、ここでは旅をしている商人が主語なので、便宜的に「故郷で」と訳出しておいた。

解答

問1 飼い主は大切な鸚鵡の鳥籠の造作や餌の質に配慮して飼つたということ。

問2 家の者がお前に餌や水をやるのは、適切な時刻であつたかどうか

問3 禁獄の辛さを体験した段が、鸚鵡の言葉を聞いて籠の中の境遇に同情し、飼つていた自己の非を悟つたから。

問4 秦で鸚鵡に声を掛けられた呉の商人が鸚鵡の飼い主だった段氏に会う時。

問5 私のために、鸚鵡は決してあなたを忘れないと伝えてください。

【問題】（自習）

出典：『貞觀政要』（政体）／ オリジナル問題

書き下し文

貞觀五年、太宗侍臣に謂ひて曰はく、「國を治むると病を養ふとは異なること無きなり。病人は愈ゆるを覺ゆれば、彌須く將護すべし。若し触犯有らば、必ず命を殞すに至らん。國を治むるも亦然り。天下稍安ければ、尤も須く兢慎すべし。若し便ち驕逸せば、必ず喪敗に至らん。今天下安危は、之を朕に繋く。故に日に一日を憤み、休しとすと雖も休しとすること勿し。然れども、耳目股肱は、卿輩に寄す。既に義として、一体に均し。宣しく力を協せ心を同じくすべし。事安からざる有らば、極言して隠すこと無かるべし。君臣相ひ疑ひ、備に肝膈を尽くす能はずんば、實に治國の大害と為るなり」と。

現代語訳

貞觀五年に、太宗皇帝が左右の側近たちに語つて（以下のように）言つた。「國家を治めるのと、病気を治療するのとは違ひがないものである。病人は治つたと思ったときこそ、ますます大事に養護しなければならない。もし、（その治りぎわに療養のとき心がけていた）禁制を破ることがあれば、必ず命を落とすことになるであろう。國家を治めるのもまた同様である。天下が少しばかり安らかに治まつたときこそ、最も畏れ慎むべきである。もし、（為政者たる者が）軽はずみにいばつてわがままなるまいをすれば、必ず（国）滅亡に至るであろう。今、天下が落ち着くか揺らぐか（の責任）は、自分一人にかかる。だから、日々用心に用心を重ね、いくら、国は安泰に治まっていると（人から贊美）されても、（まだまだ自分では）安泰だとは考へない（よう用心がけてはいる）。しかしながら、自分の耳や目や手足（としての実際の政務上の役割）は、（すべて）諸君を頼りとしている。そうしてしまつた以上は、話のすじみちの上からいえば、（自分と諸君とは）一つの身体と同様である。どうか力を合わせ（私と）心を一つにしてもらいたい。もし、これはあぶないとと思う事があつたならば、とことん言い尽くして包み隠すことのないようにしてもらいたい。（もし、）君主と臣下とが互いに疑いあい、何から何まで心の中に思つてることを打ち明けることができなければ、ほんとうに、（それが）國家を治める上の大きな害になるのだ」と。

問1 為政者が少しでも気をゆるめると、治りかけの病気と同様に状況が悪化し、国家の危機を招くことになるから。

問2 だから日々慎重に過ごし、十分だと言われても気は抜かない。

問3 為政者である皇帝の耳や目や手足の役割を担い、情報収集や政治の実務を行つてくれる臣下の側近たち。

問4 国家の危機と思うことがあれば、全部隠さず言つてくれ。

解説

問1 理由説明の問題。まず「治国亦然」それ自体の意味を検討しよう。「治国」は訓読に従つて、「国を治めること」。「亦」は「～も～と同様に」と訳す副詞。「然」は、指示副詞「しか」とラ変動詞「あり」が結合してつづまつたもので、「そうである」と訳す形容詞的複合動詞として訓読すればよい。次に、「亦」と「然」の指示内容を明らかにしよう。「亦」は、1行目に、「治国与養病無異也」とあることから、「養病（病気を治すこと）」と同様にということだとわかる。では「然」は具体的に何を指すか。これについては、「治国亦然」を間にはさんで、「病人～殞命」（1・2行目）と「天下～喪敗」（2・3行目）が対になつてゐることに気づけば簡単。「然」は、「病人～殞命」という「養病」の説明全体を指す。つまり、「養病」で言えることは「治国」に関しても同様に言えるということだ。

ではその理由は何か。これは続く「天下～喪敗」を解釈してまとめれば解答になる。「養病」の喻えで「治国」の要諦を述べているのだ。ではその「養病」の部分を解釈していこう。「天下稍安、尤須兢慎」の「安」は「安定する」、「尤」は「特に」、「須」は再読文字で、「必ずしなければならない」と訳を当てるものである。「兢慎」は〔注〕の意味合いで理解すればよい。したがつて訳は、「天下が少し安定していると思える時は、特に畏れ慎まねばならない」となる。では、何を「畏れ慎む」のか。次の「喪敗」である。何が「喪敗」するのか。当然「天下」である。「若便驕逸、必至喪敗」は「若」が仮定の「もしも」、「便」が「すぐに・たやすく」、そして「喪敗」の主語が「天下」とわかれば問題なかつたと思う。この文脈にふさわしいのは「驕逸」については、

それぞれの字を含む熟語をいくつも想起して文脈に意味が沿うものを選択すればいい。この文脈にふさわしいのは「驕慢」つまり高ぶることと、「逸脱」つまりまともな国家運営からそれてしまうことである。「喪敗」についても同様に考えれば、「喪失」つまり失うことと、「敗北」つまり敗れてしまうことである（例えば異民族や内乱に）。解答は、核として「必至喪敗」をまとめたものを書き、その条件として、「天下稍安、尤須兢慎」を書けばよい。後は「治國亦然」の「亦」がわかっていることを示すために、「病氣の治療と同じように」といった語句を入れておけば設問意図を満たすだろう。解答参照のこと。

問2 まずは前半の「故日慎一日」から考える。「故」は接続詞で「だから」。「日」は副詞で「日々」「毎日」の意味。「慎一日」は「一日を慎んで過ごし」というような意味だが、「日」といっしょにすると「毎日を一日一日と慎んで過ごし」と解せる。これをうまくまとめると解答のようになる。

次に後半の「雖休勿休」について。「休」は「安」に通じゆつたりとおだやかな様子をいうが、ここでは「休^{よシ}」と読んでいるので、「十分だ、大丈夫だ」の意味でとればよい。「雖」は、逆接の確定条件で、「もし^シだとしても」と訳す。その他の部分も、きちんと訓点がほどこしてあるので問題はないはず。逐語訳は、「十分だとしても、十分だとしない」だが、これだけではわかりにくい。ここでは「十分だとしない」を、「気を抜かない」「安心しない」といった意味で解釈すればよいだろう。

問3 設問の要求は以下の二つである。

- ① 「耳目股肱」の意味の説明
- ② ①の具体的な内容の指摘

①については、「耳目」が「耳」と「目」、つまりは情報の入口であるということと、「股肱」（「股」は「また」、つまりは脚のこと）。「肱」は「ひじ」（つまりは腕のことである）が「手足」としての実際の仕事を意味するものであるということがおさえられていい。あとは②。この部分は1行目に「太宗謂侍臣曰」とあるところから、君主の「太宗」に代わって情報収集をし、政務に当つてくれるもの、というふうに具体化できよう。したがつて、「臣下」「側近」ぐらいの指摘ができるればOK。「股肱」は「腹心」と同様にそれだけで「信頼できる部下」の意に用いられることがある。ちなみに、この傍線部分直後の「卿輩」とは、目の前にいる相手を尊称する語である。太宗が臣下に対して親しみをこめて語りかけている文脈を読み取りたい。

問4

前半「事有不安」の条件節については、簡単だろう。「不安」は「不安定」、転じて「危機」。「事」は漠然と何かを指す言いかたのようだが、これは後の「治國之大害」（5・6行目）につながるものであるところから意味をつかんでいけばいい。ここでは国家のことが論じられているわけだから、「もし國家にとつて危機だと思うことがあるならば」と訳せる。「可極言無隱」については、「可」はこの場合、《可能》ではなく《勸誘》でとりたい。太宗が目の前にいる臣下に向かって言っているので《命令》と考えられないこともないが、問3で検討したように、「臣下」のことを「卿輩」（4行目）と呼んでいることから、きつい《命令》ではなくやんわりとした《勸誘》の方がいいだろう（因みに、「可」は助動詞で、漢文では《可能》（～することができる）、《許可》（～してもよい）、《勸誘》（～してくれ、～しよう）の三つの意味があることは覚えておこう）。残るは、「極言」の訳出である。これは「極論」ではなく、「極^{きわメテ}言」^ヲと解して、「言葉を尽くして」「ことん議論して」という意味だと判断すべきだろう。要するに「隠さずにどんどん言つてくれ」ということ。解答は「全部」としておいた。この辺の表現は、意味をしつかりおさえて、解答欄のスペースから考えること。

【問題】（演習）

出典：『右台仙館筆記』／東京大学 08年

書き下し文

周鉄崖屢々秋闌を試くるも售からず。一日他處より帰り、夜船を村落の間に泊む。水に臨む一家を望見するに、樓窓の外に碧火の環なるがごとき有り。舟人見て駭きて曰く、「縊鬼代を求むるに、多く此の状を作す。此の家必ず將に縊りて死なんとする者有らん。慎んで声する勿れ、鬼人の覚る所と為れば、且に禍を人に移さんとす」と。周奮然として曰く、「人の死なんとするを見て救はざるは、夫に非ざるなり」と。岸に登り、門を叩きて大呼す。其の家出て問ひ、告ぐるに故を以てすれば、大いに驚く。蓋し姑婦方に勃谿し、婦泣涕して樓に登る。周の言を聞き、亟やかに共に樓に登り、闇を排きて入るに、婦手に帶を持ちて牀前に立ち、神已に痴たり。之を呼ぶこと踰時にして始めて覺め、拳家共に之を勧慰すれば、乃ち已む。周次日家に抵る。夢に一老人之に謂ひて曰く、「子善を為すに勇なり、宜しく其の報を食くべし」と。周曰く、「他是敢へて望まず、敢へて問ふ我科名に於いて何如」と。老人笑ひて示すに掌を以てす。掌中に「何可成」の三字有り。宿めて歎じて曰く、「科名望無からん」と。其の明年、竟に賢書に登る。是の科の主試は何公為れば、始めて夢語の巧合を悟るなり。

現代語訳

周鉄崖は何度も秋の科挙を受験したが合格しなかった。ある日他所から（自宅へ）帰る途中、夜になつて（乗つて）いる船を（ある）村の中に留めて泊つた。川面に面した一軒の家を遠くから見ると、高殿の窓の外側に碧い火で環のような（形をして）いるものがある（のを見つけた）。船頭が（それを）見て驚愕して言うには、「首縊りで死んだ者の靈魂が（人間界へ戻るための）代り（の死者）を探している時に、よくこの（ような）形（の鬼火）となる。この家にはきっと首を縊つて死にそうな者がいるのだろう。用心して音を立

ててはなりません。靈魂は人間に（その存在や活動を）覺られると、禍を（その）人に及ぼそうとします」と。（それを聞いた）周は（気持ちが）奮い立つた様子で言うには、「人が死のうとしているのを知つて救わなのは、一人前の男子（のすること）ではない」と。（周はそのまま）岸に登つて（問題の家の）門を叩いて大声で呼ぶ。その家（の人が）出てきて用件を問い合わせ、（周が大声で呼び出した）理由を告げると（応対に出た人は）たいへんに驚いた。（その家の）姑と嫁がちょうど喧嘩をし、嫁が涙を流して泣きながら高殿に登つた（ところだった）からだ。周の言葉を聞いて、すぐに一緒に高殿に登り、小門を開いて（中へ）入つてみると、嫁は手に帯を持って寝台の前に立ち、精神がすでに虚ろであつた「=茫然自失していた」。（彼女の）名を呼ぶことがしばらく繰り返されて「=何度も名前を呼んで」、やつと（放心状態から）覚め（たので）、家中の者がこぞつて嫁に気を取り直すように勧めて「=自殺を思いとどまるよう気に気持ちを慰めて」、そこで（ようやく嫁は自死を）思いとどまつた。周は（その）翌日自宅に着いた。（その夜の）夢で一人の老人が（現れて）周に告げて言うには、「あなたは善行を為すに際して勇敢であつた、きっとその果報を享けるでしょう」と。（そこで）周が言うには、「他のことは特に望みません（が）、是非お訊きしたい、私の科挙合格についてはいかがでしょうか」「=私は科挙に合格できるでしょうか」と。老人は笑つて（自分の）掌を（周に）示した。掌には「何可成」の三字が（書いて）あつた。（周は夢から）目覚め、歎息して言うには「科挙合格の望みはないようだ」と。その明くる年、ついに秋の科挙に合格した。この（時の）科挙の総責任者は何という（姓の）方だったので、（周は）はじめて夢の（中の「何可成」という）言葉が（自分の科挙合格に）ぴったり符合していたことを知つたのであつた。

解答

問1 音を立てて人が見ていることを首を縊つた者の亡靈に気づかれると、亡靈がその人に禍をもたらすから。

問2 姑と喧嘩した嫁が高殿に登つていった矢先に訪れた男に、家の中の誰かが自殺をすると聞かされたから。

問3 家中の者がこぞつて嫁を慰めて、やつと嫁は自殺を思いとどまつた

問4 なんぞなるべけん（や）

問5 科挙合格後、夢の中の「何可成」の三字は何姓の試験官の下での合格という意味であつたことがやつとわかつたということ。

【問題】(自習)

出典：羅大経『鶴林玉露』／早稲田大学 第一文学部 83年

書き下し文

高適は五十にして始めて詩を為り、少陵の推す所と為る。老蘇は三十にして始めて書を読み、歐公の許す所と為る。功深力到に、早きも晚きも無くなり。聖賢の学も亦た然り。東坡の詩に云ふ、貧家淨かに地を掃ひ、貧女巧みに頭を梳る。下士晩に道を聞き、聊か拙を以て自ら修むと。朱文公毎に此の句を借りて話題と作し、窮郷の晩学の士を接引す。

現代語訳

高適は五十歳になつて詩作を始め、杜少陵（杜甫）から推奨された。老蘇（蘇洵）は三十歳になつて読書を始め、歐公（歐陽脩）から認められるまでになつた。努力してその道で秀でるのに年齢の早いも遅いもない。聖人や賢人の学問を学ぶのも同様である。蘇東坡（蘇軾）の詩に「貧しい家でも地面を掃き清め、貧女でさえ上手に髪をとかす。貧しい身分の人でも年をとつて人生の教えを聞けば、それなりに自分の身を修めるものだ」とある。朱文公（朱熹）はいつもこの言葉を借りては話の糸口にして、田舎に住む、年をとつてから学問を修めようとしている人々に面会した。

解答

問1 (ア) 问2 (ウ) 问3 (ウ)

問4 つねにこのくをかりて〔10字〕／〔別解〕このくをかるごとに〔9字〕

問5 晩（本文2行目ほか）

問1 基本的な句法の知識を問う問題。傍線部(1)は、「為_{〔名詞〕}……所〔動詞〕」に着眼すれば、「……に「動詞」された」という「受身」の句法と判断できる。傍線部(1)は、主語が「高適」であって、「推」は「推薦・推举」の意味だと考えられるから、「高適は少陵に推举された」という意味になる。ただし、この場合、句法に気づかなくても、「受身」であることは導き出せる。まず、「所」は下に続く動詞を名詞化し、動作・作用の対象を表す語である。訳す際は、表す対象に応じて、「人」や「もの」「こと」と訳し分ける。「所得」「所信」の「所」である。すると、傍線部(1)の直訳は、「高適は少陵が推举する（対象の）人となった」となる。これだと主語が二つもあり、文意が通じにくいので、「推举する」の主語を「高適」にすると、「高適は少陵に推举された」と、結果的に「受身」となる。

そこで、書き換えを要求されている「推「」」少陵」も、「受身」の意味になる。前置詞「於・于・乎」を使った受身の句法が思い浮かべば、すぐに(ア)と決定できるが、これも、句法を知らなくても「漢文の構造」から導き出せる。この文では、「」」に何が入るにせよ、「少陵」は「推」という動詞の下にきてるので、主語ではない。主語は述語（動詞）の上にしか置かれないのである。この文は「少陵に推される」という「受身」の意味になるのであり、「少陵」には「に」という送りがなが付けられると考えられるので、「少陵」は補語。動詞の下の語が補語であることを明示するのは、(ア)「於」だけである。したがつて正解は(ア)。

問2 「無」は、下に主語がくる動詞。この場合は「早晚」が主語になる。したがつて、「無_{〔名詞〕}早_{〔名詞〕}晚_{〔名詞〕}也」（または「無_{〔名詞〕}早_{〔名詞〕}晚_{〔名詞〕}なり_{〔名詞〕}也」）と訓読できる。意味は「早いも遅いもない」となる。「晚」は「晚成」「晚婚」という熟語から「おそい」という訓が浮かぶ。正解は(ウ)。「早」と「晚」が並列関係にあることに注意。(イ)・(オ)は「早」の、(カ)は「晚」の解釈がないので不可。(エ)は並列関係で解釈してはいるが、傍線部(2)は、「高適は五十歳で詩を始めて大詩人杜甫に推薦されるほど上達し、蘇洵は三十歳で書物を読み始めて、大文人の歐陽脩に認められるまでになつた。」というエピソードに続く感想の部分だから、「昼」「夜」という解釈が出てくるのはおかしい。また、(ア)は「早くしないとおくれる」と「早」を「晚」の条件句ととつてているので不可。

問3 空欄Aを含む部分が、東坡の詩であることに着目。「貧家「A」掃地」と、続く「貧女巧梳_レ頭」の二句は、対句となつて

いる。したがって、「A」には、「巧^{たのま}」という副詞に相応する語が入ることとなる。(ア)「有」は動詞、(イ)「不」は否定詞だから不可。(ウ)「かはすべて副詞だが、「巧」が動作の状態を修飾しているのに対し、(エ)「再^{ふたたび}」や(オ)「時^{とき}」は動作の状況(回数・時間)を表しているから不可。また、(カ)は「徒^{いたづな}」と読んで、「無駄に、意味もなく」というマイナスの意味の副詞である。「徒勞」という熟語を思い出してほしい)が、「巧」は動作のすぐれた状態を表すプラスの意味の副詞であるから、これも不可。したがって正解は(ウ)「淨」。「淨化」「洗浄」などの熟語から、「きれいに・清潔に、清らかにする」という意味を持つとわかる。「掃^{はら}地^じ」とも意味の上でつながり、「淨^{きよらか}」と読んで、プラスの意味になる。

問4 白文を訓読する場合は、まず動詞を見つける。この場合は「借」しかない。漢文は古文で訓読するという原則から、これは、「借る」と読む。ラ行四段動詞である。上二段ではないことに注意。「借」は他動詞であるから、下の「此句」は目的語。そこで、「借^{かる}此^{この}句^ヲ」と読めるが、続く「作^ハ話頭^ヲ」に接続させるので、「借^{リテ}此^{この}句^ヲ」とする。「每」は「毎^{つね}」と読む副詞。したがって、すべてひらがなで書き下し文にすれば、「つねにこのくをかりて(10字)」となる。ただし、「毎」は「毎^{ごよ}」[動詞]と前置詞として使うこともでき、この場合は、続く動詞を連体形にして接続する。したがって、「毎^{ごよ}借^{カル}此^{この}句^ヲ」とも訓読でき、「このくをかることに」という書き下し文でも正解となる。

問5 「窮鄉^{「B」}学^{「A」}」だから、「窮」の意味に近いものをと思うと、「貧」が選べる。「貧窮」という熟語もある。ただこれだとただの語句レベルの問題になってしまふ。ここでは、朱文公(朱熹)が東坡(蘇軾)の詩をいつも引用し、それを話の枕として「窮鄉^{「B」}学之士^{「A」}」をもてなしたということが言われているのである。「窮鄉」というのは、「貧しくて田舎者」の意味。だから、「B」にあらためて「貧」を入れる必要はない。詩の中の「下士^{晚聞道}」に注目。「下士」とは、すなわち「窮鄉^{「B」}学之士^{「A」}」である。「晚」というのは、「朝晩」ではなく、「晩年」の意味。この文全体で、学問を始めるのには早いも晩いもなく、晩くから始めても大成する人はいるということを言っているのである。したがって、空欄Bには、「晩」が入る。「晩学」というのは、この文章の主題である。

さて、入試問題では一般的に最後の問題は、主題・主旨を問う問題であることが多い。単なる語句問題で解こうとすると失敗することもあるので注意が必要だ。

●
×
毛
●

【問題】（演習）

出典：戸井田道三『忘れの構造』「アイマイの効用」／一橋大学 90年

文章略解

自然を観察する場合、数をかぞえるような見方をすると風趣が消えてしまう。領域が違えば、表現の仕方もまた違うのだ。数学的な考え方と芸術的な認識。実際の生活ではこの両者を使い分けっていて、そのこと自体を忘れている。注意して見る場合、見る対象を選択して見ている。選択に漏れた対象は、半注意の状態で見ている。この部分が周囲に残像として記憶されるから、焦点が注意の対象として明確化するのである。

解答

問1 主体の感じた気分や意味、雰囲気等を他者に表現するということ。

〔30字〕

問2 風景の中に動くものが何もなく、生命を感じさせないということ。

〔30字〕

問3 周囲のものが半注意の状態で見られ、それが残像となつて記憶されることで、注意の焦点である対象が却つて明確化するところ。

〔58字〕

【問題】(自題)

出典…中村雄二郎『考える愉しみ』／お茶の水女子大学 82年

文章略解

ものが名をもつことは、それが秩序の内に位置づけられることであり、明確な形で顕われることである。こうした場所として一つの世界が開けることでもある。ただし、人が言葉を知ると、それにとらわれて虚心にありのままのものを見にくくなる。言葉と事物とのギャップが大きい時代になると、事物と離れた言葉ばかりを相手にせざるを得なくなりがちだ。しかし、そのための言語の拒否も、裏側から逆に言語の存在を確立することになる。

解答

問1 それぞれの存在が、名と共に、他と共有できる公的な秩序の内に位置づけられ、明確な形で顕われてくる、そんな相互主観的世界が出現するということ。〔69字〕

問2 偶々泊まっていた民宿で、突然「今日からペンションになった」と宣言されたが、実態は何ら昨日までと変わっていない。〔55字〕

問3 言葉は事実そのものを表現しないからと、それを呪詛したり、非言語的コミュニケーションや沈黙を重視すること。〔52字〕

解説

問1 まず考えなくてはならないのが、「そうした場所として」という傍線部ア前半部分の「そうした」という指示語の指示内容。これは、「つまり、ものが名をもつということは、……」以降、「また」という傍線部ア直前までを受ける。傍線部ア後半の「一つの世界がひらける」は、第二段落「これまでの閉された暗い肉体の世界から解放される」あたりを手掛かりとして考える。「名前」対「もの・肉体」の対立関係である。

因みに、左図のような関係を把握してほしい。

〔第二段落〕

Xすべてのものには名前があることを知った。そして、それによつて

←

Yこれまでの閉された暗い肉体の世界から解放される

Xものが名をもつ、あるいは、ものを名づけることの

←

y神秘

〔第三段落〕

X命名や、名とものとの間の関係には、

←

y多かれ少なかれ、儀式的なところ、魔術的なところがある。

X命名されることによつて

←

yはじめて公なものとなる。

X改名することによつて

←

y生まれかわろうとする。

X ものが名をもつということは、

←

Y そのものがなんらかの秩序のうちに位置づけられることであり、その存在が明確なかたちをとつて顕われることであり、

+ (また)

Y そうした場所としての一つの世界がひらけることである。

問2

「もともと……が、とくに……大きい時代になると」 という言い回しから、「が」で受けられている前提部分にまず着目して考える。「……」部同士が重なることから、「名やことばは、ものやことをそのまま表わすわけではない」 = 「ことばと事物とのギャップ」ということになる。これが、第一の根拠。

続いて、この傍線部(イ)を含む一文の冒頭「そして」で受けられる前提個所に着目する。すなわち、「まず、名やことばを知る」とによって、命名されぬ以前のものを直接見ることができなくなる、ということがある。もう少し正確にいえば、名や既成のことばにとらわれて、虚心にありのままのものを見にくくなる。」が、第二の根拠。

最後に、「とくにことばと事物とのギャップが大きい時代になると」どうなるのか。「多くの場合、人々は、事物と離れた名やことばばかりを相手にせざるをえなくなる。」これが、第三の根拠。

問3

左図のような構成から考える。

a 詩人によって「ことばを知った」ことを呪詛されたり、

言語的コミュニケーションにかかる非言語的コミュニケーションが重視されるようになつたりする……

〈だが〉

a 「ことばを知った」ことを呪詛する詩も→βことばによつて書かれているわけだし

a 非言語的コミュニケーションも

$\downarrow\beta$ これを正当に位置づけ、基礎づけようとすれば、言語によつて、言語理論との結びつきにおいてはじめてなされよう。

a 沈黙もまた $\downarrow\beta$ それが深い意味をもちうるのは、ただ、言語活動との緊張関係のうちに、あえて黙つているときだけである。

⇨ (すなわち、これらの例を通じてうかがえるように、)

a 言語の拒否は、 $\downarrow\beta$ 裏側から逆に言語の存在を確立することになるというパラドックスが、そこにはある。

a 同士を結び付けて考える。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--